EVENT REPORT

2026 年 11 月吉日

イタリアを代表するラグジュアリーファニチャーブランド「FLEXFORM」「DESIGNART TOKYO 2026」公式トークステージにて トークイベント「FLEXFORM ― 100 年先まで響き続けるもの」を開催

柴田文江氏、パトリック・ノルゲ氏、永山祐子氏が語った
響きと調和、人の手によるものづくり、そしてモノと人との「親密な関係」
モデレーター：『ELLE DECOR』編集長 橋田真木氏



左から：『ELLE DECOR』編集長 橋田真木氏、建築家 永山祐子氏、デザイナー パトリック・ノルゲ氏、プロダクトデザイナー 柴田文江氏

イタリアを代表するラグジュアリーファニチャーブランド「FLEXFORM（フレックスフォルム）」は、「DESIGNART TOKYO 2026」のオフィシャル・ステージパートナーとして、2026 年 11 月 1 日（日）、メイン会場「AUTOBAHN ／ KK 線」の公式トークステージにてトークイベント「FLEXFORM - 100 年先まで響き続けるもの」を開催しました。
FLEXFORM の 2026 年新コレクションにも携わるプロダクトデザイナーの柴田文江氏とフランスのデザイナー、パトリック・ノルゲ氏、そして建築家の永山祐子氏が登壇。『ELLE DECOR』編集長の橋田真木氏のモデレートのもと、それぞれの作品やプロジェクトを紹介しながら、変わりゆく時代にあっても人の心に響き続けるものづくりについて語り合いました。



モデレーター：『ELLE DECOR』
編集長 橋田真木氏

■ 「響き」は、調和のなかに生まれる

DESIGNART TOKYO 2026 のテーマ「Hibiki（響き）」について、ノルゲ氏は「響き（レゾナンス）は、私の仕事、そしてデザイナーという職業の基盤ともいえる言葉」と語りました。デッサンを重ねながら、人の感情や感性に響くオブジェを生み出そうとしていること。その響きは文化や国を越えて、人が無意識のうちに感じ取る普遍的なものであり、最終的には人と人、人とモノとの関係のなかにある「調和」から生まれる、と続けました。

永山氏は建築家の立場から、ファッションのように速く移り変わる世界と、建築のように長くあり続ける世界が二分化しつつあると指摘。「どちらが正しいということではなく、速い世界と遅い世界が相乗効果を生みながら進化していくのだと思います。情報が多くスピードの速い世界にいるからこそ、人は質感や重さのある『今ここ』の世界に救いを求めていく」と語りました。

■ 柴田文江氏｜人の手でしか生まれない、三次元の革



プロダクトデザイナー 柴田文江氏

柴田氏は、FLEXFORM との協働の原点として、自身の故郷である富士山麓の織物の町にかつて「甲斐絹（かいき）」と呼ばれる優れた技術があったことを紹介。手間がかかり高価になったことで作られなくなった技術への思いから、「人の手による技術を、作り続けるものづくりに関わりたい」とミラノでの仕事を志したと語りました。

初めて革の製品をデザインする際、FLEXFORM から「何でもできるから、何でも言って」と言われたことから、二次元の素材である革を三次元の曲面に張ったアームチェア《ERI》が誕生しました。「普段は 3D データでデザインしますが、工場ではペンを渡されて形を変えたり、ハサミで革を切らせてもらったりする。その場でものを見て、職人の声を聞かなければわからないことがたくさんあります。デザイナーとして 30 年ほどのキャリアのなかで、本当のものづくりを実感できるブランドです」。

テーブル《ENN》では、スケッチを持っていくといつも「サイズが小さい」と言われるという、日本とヨーロッパの感覚の違いにも触れ、限られた空間で工夫しながら暮らす日本人の感性とヨーロッパのものづくりを掛け合わせることが、自身の役割だと話しました。2026 年の新作《SORETO》については、「家具と家具のあいだをつなぐもの。デザインが主張するのではなく、あなたの暮らしと“それと”家具がある、暮らしの背景になるようなものを目指しました」と、名前に込めた思いを明かしました。

■ パトリック・ノルゲ氏｜「良いデザインとは、長く続くデザインである」

4 年前に始まった FLEXFORM との関係について、ノルゲ氏は「ごく自然な形で響き合い、協働するようになった」と振り返り、大きな歴史と伝統を持つ企業でありながら、創業家の哲学が生き続け、人のぬくもりが感じられることが FLEXFORM の魅力だと語りました。

また、加速と過剰消費の時代にあって、FLEXFORM との仕事では時間とのまったく異なる関係を築けると話し、敬愛するディーター・ラムスの「良いデザインとは、長く続くデザインである」という言葉を引用。「私たちが目指すのは過剰な消費ではなく、賢い消費です。ディテールに意味があり、素材の官能性によって、人生に長く寄り添えるタイムレスなものづくりを、FLEXFORM とともに追求しています」と述べました。



デザイナー パトリック・ノルゲ氏

《OZZY》の着想源は、衣服の世界にあります。ルイ 14 世の時代から現代までの服飾史の本で、17 世紀のシャツの襟の誕生――貴族と庶民を分ける社会的な転換点となったディテール――に出会ったことから生まれました。馬具の技術を用いた厚みのあるフルグレインレザーに金属の補強を組み合わせ、シンプルな折り返しのディテールそのものを座の構造としています。「革は私たちとともに年を重ね、風合いを増していく素材。時間とともにその官能性が表れ、モノを通して受け継がれていくのです」。

■ 同じ工場、異なるアウトプット。そして「襟」という共通点

ノルゲ氏の話を受け、柴田氏は「同じ工場に行き、同じインプットをしているのに、アウトプットがまったく違うのが面白い」とコメント。ネジひとつに至るまで工場から 1 キロメートル圏内のメイド・イン・イタリーにこだわる「キロメートル・ゼロ」の精神を持つ FLEXFORM を、異なる文化を背景に持つデザイナーが再解釈することで、いまの時代に新しく、そして普遍的なものが生まれると語りました。

さらに柴田氏は、《ERI》の名もまた「襟」に由来することを明かしました。「襟を立てると、自分のプライベートな空間ができる。衣服の次に身体に近い家具で、ルーツは違うのに二人のデザイナーが同じ『襟』をテーマにしていたことに、いま一人で感激しています」。

永山氏も、会場の家具を「後ろ姿まで美しい」と評し、「じっくりと時間をかけてつくられたものは、長く使われ、愛されていく。そうした世界はこれからも残っていってほしい」と語りました。

■ 永山祐子氏｜時間のスケールが変われば、建築のあり方も変わる



建築家 永山祐子氏

万博のように会期の決まった建築と、長く住み継がれる住宅。永山氏は、タイムスパンによって考え方もつくり方も変わると語り、ドバイ国際博覧会日本館のファサードのパーツを組み替えて大阪・関西万博「ウーマンズ パビリオン」へ、さらに２０２７年国際園芸博覧会の屋内出展施設「はなめぐり」へと循環させている取り組みを紹介しました。「最初から壊されることが運命の建築に、サステナブルな循環という考え方を入れることで、建築の持つ普遍性に近づけないか、と挑戦しています」。

一方の住宅では、クライアント自身もまだ気づいていないニーズを掘り起こすことが大切だといいます。住まいを訪ね、家族のいまの姿と、子どもが育った先の姿を思い描きながら提案する。「最初の要望を無視するわけではないけれど、あまり信じきらないことが大事」という永山氏の言葉に、ノルゲ氏は「無意識の欲望を引き出してくれる、精神科医のよう」と応じました。

■ The Private Lives of Objects――モノの「もうひとつの人生」

トークの締めくくりに、FLEXFORM の 2026 コレクションのコンセプト「The Private Lives of Objects」について問われたノルゲ氏は、「それは人とモノとの関係、プロダクトとのあいだに生まれる親密さのこと」と答えました。

「私たちデザイナーは、暮らしのシナリオを想像しながら、生きるための道具を手渡しているにすぎません。持ち主のもとでモノは第二の人生を得て、文化を越えて旅をしていく。そこから先は創作の手を離れていく。それがたまらなく面白いのです」。

さらに、FLEXFORM は文化的な遺産とモダニティ、そして継承が交差する場所にあり、日本やヨーロッパなど異なる文化を持つデザイナーを受け入れ、吸収する力を持つブランドだと述べ、「それこそが、明日の世界をつくる鍵です」と語りました。

トークは、橋田氏が「継承と進化、響き合いと調和」というキーワードで総括し、幕を閉じました。

■ ステージについて

トークが行われた公式ステージは、柴田文江の《ERI》とパトリック・ノルゲの《OZZY》でしつらえました。異なる感性から生まれた二つの作品が静謐なひとつの世界観のなかに調和する空間で、二人のデザイナーはみずから手がけた家具に身を委ねながら語りました。




■ 登壇者





Fumie Shibata　柴田 文江（プロダクトデザイナー）
日本を代表するプロダクトデザイナー。
家具から日用品、ヘルスケア機器まで幅広い分野で活動し、iF Design Award Gold Prize や Red Dot Design Award Best of the Best などを受賞し、国際的に活躍しています。FLEXFORM の 2026 年新作として《SORETO》を発表。

Patrick Norguet　パトリック・ノルゲ（デザイナー）
フランスを代表するデザイナーの一人。
家具から空間デザインまで幅広く手掛け、機能性とエレガンスを兼ね備えたデザインで国際的な評価を得ています。FLEXFORM の 2026 年新作として《LOUISE》を発表。

Yuko Nagayama　永山 祐子（建築家）
青木淳建築計画事務所を経て 2002 年永山祐子建築設計設立。主な仕事に「豊島横尾館」「ドバイ国際博覧会日本館」「東急歌舞伎町タワー」、大阪・関西万博「ウーマンズ パビリオン」と「パナソニックグループパビリオン『ノモの国』」など。現在「Torch Tower」などの計画が進行中。著書に『建築から物語を紡ぐ』（グラフィック社）、『建築というきっかけ』（集英社新書）がある。

■ FLEXFORM TOKYO のご案内

ステージで語られた家具は、東京・南青山の旗艦店「FLEXFORM TOKYO」でご覧いただけます。自然光が広がる 3 フロアのショールームでは、柴田文江の《SORETO》、パトリック・ノルゲの《LOUISE》をはじめとする 2026 年の新作も展示。選び抜かれた素材と細部に宿る職人の手仕事を、ぜひ間近にご体感ください。



■ **FLEXFORM TOKYO 店舗概要**

所在地	〒107-0062 東京都港区南青山 5-3-20 ブルーサンクポイント B 棟
営業時間	11:00～19:00
定休日	水曜日（祝日を除く）
アクセス	東京メトロ「表参道駅」A5 出口より徒歩約 4 分
TEL	03-6418-5590
URL	https://www.flexform.jp/
Instagram	https://www.instagram.com/ffj_tokyo

■ **About FLEXFORM**

1959 年創業の FLEXFORM は、イタリアの豊かな職人文化を背景に誕生したラグジュアリーファニチャーブランドです。世代を超えて受け継がれるクラフツマンシップと、時代を超越するタイムレスなデザインを融合させながら、静謐なエレガンスと比類なき心地よさを追求してきました。家具は単なるインテリアではなく、人生に寄り添い、ともに時間を重ねる存在である―。その哲学のもと、世界中の住空間に上質なライフスタイルを提案し続けています。

https://www.flexform.jp/